
あなたにおまえとよばれない

新井ゆうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたにおまえとよばれない

【Nコード】

N3122S

【作者名】

新井ゆうた

【あらすじ】

「わたしね、ずっと前から好きだったんだ……お兄ちゃんのこと……親友の、司さんのこと」

血の繋がらない妹が好きだと言い出したのは、なんと自らの親友だった。様々な葛藤の末に妹を応援することにしたものの、そこには一つ問題が。件の親友は、モテモテなのだ。それはもう、『信号待ちの色男伝説』というものを残しているほどに。だから当然、学校でもハーレムを形成している。果たしてそこに妹が入っていく余地がどれだけあるのか……いや、無いのなら、作れば良い。そのため

には、親友に好意を持つ女子が、周りからいなくなれば良い。そう
うだ。ならば、やるべきことはただ一つ

「……俺は、妹のためにっ！ 親友のハーレムを乗っ取ってやるっ
っ！」

そんなこんなではじまる、オスライオンちっく青春ラブコメ
デイ。

1話その1

始業式が終わり、俺は妹と帰路に着いていた。

風に揺られた花びらが舞う桜並木の中、連れ添う妹は頬を軽く染めて、今日の学校での出来事を興奮気味に話す。話の切れ目でころころと変わる表情を、俺は相槌を打ちながら眺めていた。

肩の辺りで切り揃えた髪が、歩く動作にに応じて顔の輪郭をなぞる。丸みを帯びたそのラインは、大きくてぱっちりとした目と、小ぶりの鼻、桃色の唇を囲っていた。そして、それらのパーツが保っている絶妙なバランスは、妹自身の感情の発露によって崩され、一コマごとに違った魅力を引き出してゆく。

入学初日にして着こなしてみせた制服と、気合の入った化粧により、今の妹を他人が見たとき真っ先に抱く感想は「綺麗」というものだろう。しかし素の印象が強い俺にとっては、それが背伸びしているようにしか見えなくて、妹がいつも一層可愛く思えた。

「それで……って、どうしたの？ お兄ちゃんの顔、にやにやしてる」

「いや、美奈は可愛いなあ、と思っていたらつい、な」

怪訝そうにこちらを覗き込んでくる妹に、にやけ顔を自覚しながら堂々と返す。我ながら大したシスコン発言だが、今さら隠す気もしない。

「……まったくもう、そんなだからどこに行ってもシスコン認定されるんだよ。分かってる？」

妹が眉根を下げて呟いた台詞に、俺はもちろん、と頷いた。困ったような顔をして美奈が可愛いことなど、承知の上だ。

「だって俺は、シスコンである自分に誇りを持っているんだぞ。分かってやっているんだ」

胸を張りながら冗談交じりに、美奈がブラコンだったら両思いなんだがなあ、と付け加えて、笑い飛ばした。

そうして数歩　ふと、隣が空席になる。

振り返れば、妹は俯いて立ち止まっていた。

それは『お兄ちゃんって本当に兄馬鹿なんだから！』なんて反応を期待していた俺には予想外で、少しからかい過ぎたかと焦りながらも、どうした、と声をかける。

答えは沈黙。

先ほどより開いた俺たちの間を、風が花びらと共に駆け抜けていく。重苦しい雰囲気ではないのになぜか嫌な予感がして、背筋がすっと冷えた。

「お兄ちゃんに、伝えたいことがあるの」

耐えかねて再び口を開く前に、妹が顔を上げる。

覚悟を乗せた声。決意に満ちた表情。どこかで見覚えのある、妹以外の誰かと重なる瞳。

ドクン。

心臓が跳ねたと同時に、鮮やかだった世界が色あせていく。自分と妹を、残して。

「……なにを」

波打つ鼓動を気取られないように、無理やり押し殺した声で、それだけを口にする。

促してはならないはずだった。しかし、妹に限ってそんなことはないと信じたくて、美奈の真摯な態度を無視することは出来なくて、結局、そうするしかなかったのだ。

小さく首肯した妹。その視線は、顔を上げたときからずっと俺に向けられている。

だが、本質的には違つのだと、双眸の深遠には俺ではない何かを映しているのだと、他ならぬ自分自身の記憶が告げていた。

なあ、おまえは一体何を見ている？　誰を、見ているんだ？

俺が口を開く前に、またしても妹が先手を取った。

「わたしね、ずっと前から好きだったんだ……お兄ちゃんの……親

友の、司さんのこと」

だから、両思いにはなれない。
俺には、そう聞こえた。

1話その2

俺には、血の繋がらない妹がいる。

名前は今江美奈^{いまえみな}。年は俺より一つ下の15歳で、今春から同じ高校に通うことになった。

美奈の本当の両親は、彼女が3歳のころに交通事故で亡くなった。しかし当時、親戚の中で彼女を積極的に引き取ろうとする者はいなかったらしい。そのままどこかの孤児院にでも預けられそうになっていたところ、家族ぐるみで付き合いのあったうちの両親が見かねて名乗りを上げたのだ。

『美奈ちゃん』と呼んでいた子が妹になったときのこと。同時に、『純也^{おれ}くん』がお兄ちゃんになったときでもある。は、昨日のこのように思い出せる。そしてそのときに俺は、妹を絶対に守ると誓ったのだ。

だから今日に至るまで、妹が少しでも幸せを感じられるように努力してきた。

例えば、妹に虫を近寄らせないようにすること。彼女は昔から虫と呼ばれるもの全般が苦手なのだ。だから兄としては、ありとあらゆるところから迫ってくる奴らの侵攻を食い止めるのはもちろん、彼女が用を足したいそぶりを少しでもしたら、殺虫スプレー片手に女子トイレに突貫^{とっかん}することぐらい、当然じゃないだろうか？ 街でナンパな男に声を掛けられていたとき、悪霊退散と叫びながら塩をまくぐらいの義務は、果たすべきじゃないだろうか？

周囲から変態シスコン野郎と罵^{のの}られても、妹さえ元気でいれば構わない。むしろそんな罵倒^{のの}でさえ、俺が妹をどれだけ大事にしているのかを表す勲章^{くんしょう}のようで、小気味よい。

こんな兄だが、妹だって慕^{した}ってくれていた。

俺が妹を手放さない限り、この関係はこれからも続くのだろ
う。

勝手にそう思い込んでいた昨日までの自分を、殴りたい。

俺には、誰よりも信頼している親友がいた。

名前は平崎司^{ひらさきしつか}。同じ年の高校二年生で、小学生のころからずっと一緒の連れだ。

艶^{つや}のある髪を男にしては伸ばしていて、やや切れ長の目は、海を凝縮^{ぎんしゆく}した色合いの宝石をはめ込んでいるようだった。鼻は低すぎず高すぎず形重視でまとまっており、淡く薄い唇は、笑顔のときに綺麗に三日月になる。

中性的に整った顔立ちは、いわゆる美形というのだろう。合唱曲でアルトパートを歌えそうな声と、170cm前後の微妙なラインの身長は、その印象に拍車^{はくしゃ}をかけていた。

さらに平崎司がすごいのは、その外見だけではない。天才並みに頭が良くてテストは常に学年トップだし、運動神経が神がかつておりスポーツは何でも出来る。とどめに女の子に優しいフェミニストであることを加えれば、向かうところ敵なしだ。

ただ、もし平崎司がパーフェクト超人であるだけなら、彼が残している様々なモテモテ伝説は生まれてこなかったはずだ。校内の女子の大半を巻き込むようなハーレムは、形成していなかっただろう。俺は思うのだ。親友の本当の魅力は、どこか謎めいた神秘的な雰囲気^{けい}をまとっているところにある、と。

そして、ここまで語ってから一つ、平崎司に関する重大な項目を付け足しておこう。

平崎司には、恋人がいたことがない。いない、ではなく、いたことがない。

つまりは年齢^{けい}≠彼女いない暦で、おそらくは、誇り高く穢^{けが}れない大日本帝国チエリーボーイ協会の、同胞である。驚くべきことだが、平崎司の初彼女は誰だ!??アンケートなるものが学校で定期的に実施されているくらい周知の事実である。

話の流れで女の子の好みを聞いてみたことがあるが、それは秘密

らしい。

あいつは誰と付き合うつもりなんだろう。まあ、俺には関係ないか。

余裕ぶって客観視していた昨日までの自分を、蹴りたい。

妹の衝撃的な告白から一夜明けて、俺は早朝から学校にいる。

昨日はあれから飯も取らずに部屋にこもり、布団を被りながら悶々と過ごしていた。何もかも忘れて眠りたい気分だったのに、頭を離れない思考に邪魔されて、結局一睡も出来ないままだ。スズメの鳴き声で朝の到来を知らされてから、家族、特に妹に見つからないよう、こっそりと家を出てきた。

まだ二日目の教室の空気は慣れないもので、他に誰も居ないという静けさもあり、寂寥感が身にしみる。季節は春とはいえ朝はまだ肌寒く、寝不足もあいまってに心が折れそうだった。

「はあ……」

妹との接し方が、分からない。

思春期の妹を持つ兄として色んな悩みや相談を受けてきたが、こんなことは初めてだった。なにせ妹がまだ小学生のとき、太陽が昇る前に起こされて『お兄ちゃんどうしよう？ おしっこが出るところから血が……』と泣きそうな顔で言われたときでさえ『美奈、落ち着こう。血が出ているなら傷があるはずだから、とりあえず拭いて、消毒する必要があるな？ でも大丈夫、全部俺が舌でやってあげるから』と務めて冷静に対処していたというのに。

……弁解しておくが、当時の俺は父さんの『そこらの怪しげな薬品なんぞ使わなくても、傷なんて唾つけておけば消毒できるものさ』という言葉を、格好良いという理由で盲目的に信じていたし、女の子のアレコレな知識を全く持ち合わせていなかったのだ。それに幸い、尿意を催して目を覚ましてきた母さんが、慌ただしい空気を察知して部屋を覗いてきたことにより、事態は未遂に終わった。

いやしかし、俺が妹を引っくり返してパジャマを脱がせようとし

ているのを発見したときの母さんといったら、まさしく鬼のような形相で、冗談抜きに死を覚悟したものだ。全身あざだらけで済んだのは、僥倖だった。

ただ今回は『お兄ちゃんの親友が好きです』と告白されただけで、特段協力してくれと頼まれたりしたわけでもない。この件について現在俺がとりうるスタンスには、いくつかの選択肢が与えられている。だからこそ、妹とどう向き合うのか、悩んでいるのだ。

視界を黒く塗りつぶし、まずは賛成した場合について考えてみる。美奈の隣に司が立ち、俺は後ろで指をくわえているという生々しい状況が、まぶたの裏にちらつく。二人は他人ではない距離で互いを見つめあい、満面の笑みをこぼしている。そして振り返った親友は、俺のことを『義兄さん』と呼び

却下だ。

目を見開いて、寒気がするようなイメージを払拭するように頭を振る。

司は間違はなく優れた人物であるし、どこの馬の骨かも分からないような輩に任せるよりは遥かに安心できる、という理論は構築できる。しかし、それと感情は別物だった。

反対したいのだ。自分よがりになるなら。妹の感情を、除けば。

だが俺が反対したら、妹はどうするだろう。分からず屋の兄だと憤慨するだろうか、同意を得られないことを悲しむだろうか。

妹を守りたいのに自分で傷つけてしまうなんて、果てしない矛盾だ。その可能性が少しでもあるのなら、絶対に避けて通りたい道である。

だから次に、賛成とも反対とも言わないことを吟味する。つまりは妹の自主性に任せるわけだが、態度を決めずに決断を先延ばしにしているだけで優柔不断だ、とも取れる。それに俺としては妹の事に無関係でいることは避けたいし、経験上、あまりにも歯がゆくて黙っていられなくなるだろう。となれば、賛成か反対かくらいは決めておいた方がいいのだが……

ぐるぐると回る思考のループ。いつまで経っても結論が出ないことは昨日から実証していたのに、どうしても陥ってしまうスパイラル。繰り返すたびに負の感情が少しずつ蓄積していくのを、悪態として吐き出さずにはいられなかった。

「くそ、司め……」

「なに朝から負のオーラ撒き散らしてんだよ」

真後ろから突然の声。耳慣れた響きの出所を、俺は驚きと苛立ちを覚えながら辿る。そこには、平崎司当人が立っていた。

ああ。

制服姿の男子が、どこか不敵な表情で教室にいるだけ たったそれだけの姿が、先ほどまでの呪詛を感嘆のため息に変えるくらい様になっていて、有名な絵画を切り取ってきた光景のようだ、とさえ思ってしまう。

本当に認めざるをえない。妹が親友に惚れていることは、思春期の少女にありがちな、恋に恋するというく勘違いの類ではないのだ。

改めて突きつけられた現実に一瞬眩暈がして、司に対応するのが、少し遅れた。

「……つたく、おまえな、朝教室に入ってきたらあいさつぐらいしろよ。いきなり後ろから声かけられたらびっくりするだろ」

平静を装って咎めながら、横目で時計を確認する。いつのまにか大分時間が経っていたようで、他の生徒の姿もぼつぼつと見かける頃合になっていた。

「したさ。不景気な面を張り付けている純也くんは、考え事に夢中で気が付かなかったみたいだけどな」

にやり、と擬音が付きそうな笑みで一拍。

「また、美奈ちゃん関係か？」

司はしたり顔で話を促してくる。さすがに10年来の親友なだけあり、こちらの悩み事などお見通しのようなようだった。しかし今回の件については、司に相談することなどは論外である。むしろ、おまえ

のせいで俺は悩んでいるんだ、と大声でなじれたなら、どれだけ楽だったろう。常なら頼もしい親友の存在が、こと、この場面ではひたすら憎たらしかった。

「別に、おまえには喋る必要もないことだ」

とぼけつつも、視線には妙な力がこもってしまふ。すると目は口ほどにものをいうらしく、司はあきれたような表情になった。

「ほーう。じゃあ、とりあえずその男に捨てられたオカマみたいな顔は止めることだな。気持ち悪いし」

「断じてそんな顔はしてないぞ！」

「でも、落ち込んではいるみたい」

机を叩きながら抗議すると、どこからか鈴を鳴らしたかのような声上がる。繊細で透き通った、小さいながらも脳裏にこだまする音色。

「大丈夫？」

その声の持ち主は、倉内晶子だ。

彼女は司の後ろからずれるように現れ、感情の機微をほとんど悟らせない顔で問ってくる。司と同じく彼女とも長い付き合いなのだが、なんとなく心配してくれている、かも？ という程度にしか気持ち汲み取れない。

「ああ、大丈夫だ。心配いらない」

「ならいい。おはよう」

まあ、司の周りにいる女子はなぜか皆レベルが高いのだが、晶子もその例に漏れていない。端的に言えば、美少女だ。

何もかも見透かされているような大きな目と、腰まで届きそうなさらさらとした直毛が特徴的で、身長が目測（正確な数字は教えてくれない）145cmほどしかなく表情に乏しいこともあり、よく<人形>みたいだと形容されている。

「おはよう……今日もお二人さんは一緒に登校か、仲が良くて羨ましいねえ」

「はあ？ 春だからってあまり頭沸かしていると不審者として通報

されるぞ？」

「たぶん生理」

確かにたちの悪いチンピラのような台詞だった自覚はあるが、それに対する二人のあまりの言い草に、俺は思わず脱力して机に伏せた。

少しぐらい、毒を吐いてもいいじゃないか。俺の頭が沸いてるとしたら原因は司自身だし、男に生理なんてものはない。

晶子はいつも、世話焼き女房さながらに司の面倒をみているし、それに、それに 二人は同じ家で暮らしているのだ。いかに家庭の事情があるとはいえ、思春期の男女が一つ屋根の下であれば、下衆な勘ぐりも多少は生まれてくるだろう？

何を隠そう、晶子は前回のく平崎司の初彼女は誰だ！？>アンケートにおいて第2位にノミネートされている、親友のハーレム要員の二大巨頭なのだから。

俺は二人が話しかけてくるのを無視して、朝のホームルームが始まるまで不貞寝を決め込んだ。

1話その3

昼休み。それは一時間もの自由を与えられた、心のオアシスである。

改めて考えてもみれば、学校では朝から教室という閉鎖的な空間に数十人もの生徒と詰め込まれ、ずっと机に座らされているのだ。ときおり挟まれるインターバルは十分しかなく、その短時間では心身ともに磨り減ってしまう。

まして学生の本分たる勉強などは、どうしても<楽しい>よりは<退屈>に軍配が上がるもの。午後の授業で放課後を待ち望むのと同じように、午前では昼休みを抛りどころにしても仕方がないだろう。さらに人間の三大欲求である食しょくを満たすことができるのも、育ち盛りの高校生としては欠かせない、重要なファクターだ。

時計の短針が頂いたをまたぐ、憩いこいの一時。つまり昼休みとは、大多数の高校生にとって、癒いしやゆとりの象徴なのである。

「よし、午前中はひとまず終わりだな。書記になったやつは板書を写して、後で出してくれ。それじゃあ解散！」

担任の掛け声があり、ほぼ同時に間延びした音が教室全体を埋めつくす。

そして辺りは、にわかに活気付いた。いつもなら俺も、おっしやー飯だ飯食くうぞー、とテンションマックスになるところだが、今はその到来を全く喜べないでいる。

朝一に家を出てきたので弁当を持ってきていないし、そもそも食欲がない。

頭の中が妹と司の恋愛関係であふれ返って、寝不足なのに眠れない。

さらに気分を落ち込ませる原因が、二つもある。

一つは、授業を受けるよりも楽なはずのホームルームで行われた、委員会決めでのこと。司に『一緒に体育祭実行委員やらね?』と振

られたのが、きつかけだった。蛇足になるが、そのときはちょうど、美奈と司が恋人になったら当然ゴニョゴニョなことも……と思考が暴走しかかっており、うわの空だったのも災わざわいして『一緒に……ヤらね?』と要所だけピックアップされて脳内に伝達されてしまったのだ。すぐに冷静になって状況を理解したものの、なんだと!?!と骨髄レベルの反射で叫んでしまった後だったので、かなり恥ずかしかった。

委員会は通常、男女のペアでやるものだが、このクラスは男子の方が二人多い。単純な組み合わせで考えるなら、理には適かなっている。その上、体育祭実行委員は毎年6月初旬に行われる体育祭の準備や雑用を行うもので、期間中は居残りはあるし、荷物運びが重労働で、体育祭を進行するという責任もある。それさえ終わってしまえば後は楽なのだが、一年生のときに大変そうだったメンバーたちの姿を思い返せば、なるべく譲りたいのが皆の本音だろう。

人が敬遠する役回りをあえて自分たちで受けようとするとは、さすが司だ。素直な好感と、妹の想い人という複雑な感情のせめぎ合いの中で、ぼんやりと頷うなずきかける。

正しくは、ところが司、だった。

次の瞬間には、女子から『てめえ辞退しろ……』という殺気を、男子から『梓が空しく受けるよ!』と半ば脅迫めいた視線を浴びせられたのだ。

どちらに転んでも角が立つ、板ばさみな状態。それも普通の司が美少女の間で繰り広げている、ピンク色のものと比べると、あまりにも格差があった。冷や汗をかき、口を動かすにも神経を使う、ドス黒い感情の嵐に晒されたあの状況で、もし晶子が俺の肩に手を置いて『あみだくじで決めれば大丈夫』という言葉と共に、天然のダイヤモンドよりも貴重な微笑みをくれていなければ、色々諦めていたかもしれない。

そう、ただ。

結局はあみだくじで、体育祭実行委員になった。十以上もある委

員会の中からピンポイントで引き当ててしまう自分の強運を呪うしかない。おかげでほとんどの女子から、視線を合わせるたびに親の敵かたきでも見るような目をされる。

「おい純也、飯食べよーぜ」

喧騒けんそうに負けないような大きめの声で、司から呼びかけられた。

もう一つの原因は、今まさに迫っているこの状況だ。

「今日弁当忘れたし、あんまり食欲ないし、いいわ。おまえらだけで食べとけよ、俺もたまには図書室にでも行ってくるつもりだし」

司と、その後ろで彼ら二人分の弁当を手に行っている晶子を、あらかじめ用意しておいた台詞で追い払おうとする。

つい先ほど司が口を開いた瞬間から、騒がしさが半減しているの
で、意識せずとも声がよく通った。それだけ、女子たちがお喋りを
せずに耳を澄ましているのだろう。

委員会決めの件で学習済みだったので、理由はいと簡単に導けた。
た。

昨日は始業式だけの午前上がりだったから、今日が二年生になっ
てから初の昼休みになる。司と昼食を共にし、あわよくば手作り弁
当を食べてもらおうと目論めくろむ乙女たちにとっては、これからが勝負
なのだ。

いまだ、機会をうかがって互いに牽制けんせいし合っている状況にあるが、
いつ爆発するとも限らない。自らを戒いましめる意味でも、同じ轍てうなど踏
むものか！ と心の中で叫んでおいた。

「その食欲がないってのは、いつからだよ」

しかし司は、形の良い眉をひそめて訊ねてくる。こういうときの
親友は元々の顔立ちが整っているせいにか妙に迫力があって、まるで
自分がイタズラをして叱しかられている子供のように思えてしまうのが
不思議だった。

「いや……まあ……昨日の昼からだか」

真正面からじっと顔を向けられると、どうにも齒切れが悪くなり、
顔を逸そらしつつもこぼしてしまう。

口を割らせるのが、上手いやつなのだ。急ごしらえの決意など、全く意味がなかった。

「……ったくもう、あんま美奈ちゃんとトラブル起こすなよ。弁当分けてやるから食べとけて、体持たないぞ？」

「実は私の手作り」

「いや、知ってるぞ」

晶子が俺の机に二つの弁当を乗せ、無表情でアピールしてくるが、相当今更な話だ。

一年生のころも昼食は一緒だったし、司の弁当が晶子の手作りであることは校内では有名な話でもある。

ちなみに晶子は料理ならどのジャンルでも一通りこなせるらしいのだが、特に和食が得意らしい。司の家に遊びに行ったときに食べさせてもらったことがあるが、本当にプロ級の腕前だと思った。

「でもそれだと、おまえの分が足りなくなるんじゃないか？」

ありがたい申し出だが、このまま流されては二の舞になる。そう考えての台詞は、予想以上の結果をもたらした。

すなわち、司が俺に弁当を分けると足りないなら、自分が作った弁当を食べてもらえるのでは！？ という論理で、ついに女子たちが動き出したのである。恐ろしいほどの反応速度で司の取り囲んだ彼女らは、

「司君！ 足りなくなるんだったら、私のを食べて！」

「実は今日ちよっと作りすぎちゃったから、もしよければ！」

「いいの。ダイエット中だから、あげる！」

「むしろ私を食べて！」

と鬼気迫る勢いでまくし立てた。

どこか不純物が混じっているそれを、司は得意の苦笑いでなだめようとするが、女子たちもなかなか手ごわい。というか、あまりに興奮しすぎていて話しなんぞ聞いてくれそうにもなく、沈黙化するにはさすがに骨が折れそうだ。

「俺やっぱり図書館行ってくるわ」

「あ、純也……」

晶子にだけ聞こえるように耳打ちして、なるべく目立たないように、そろそろと輪を抜け出す。どうせ女子たちは、司しか見えていないのだろうが。

そうして案外簡単にミツシヨンを達成し、集団から少し離れたところで 誰かと、すれ違う。

背筋が伸びていて、よどみない足取り。後ろに束ねたポニーテールが揺れて、ほのかな花の香りを残していく。こちらに一瞥もくれず、まっすぐに司と女子の群れへと突き進む姿は、凜としていた。

彼女は、木ノ下百合。同じく高校二年生だが、クラスが違うので本日初お目見えとなる。

百合も一年生のころは昼食を共にしていたので、そのうち来るだろうとは思っていた。彼女こそは前回のく平崎司の初彼女は誰だ！？>アンケートにおいて序列第一位に輝いた、晶子と合わせて二大巨頭と称される猛者だ。

クールな印象を与える目元と、鼻筋の通った美人で、女子剣道部に所属しており去年のインターハイで個人優勝したという、とんでもない実力者である。

身長も160cm後半でモデル顔負けの体系であり、なにより男子たちを惹きつけてやまないのは、その豊富な胸だった。制服を内側から押し上げる立派な膨らみは、一説によるとGカップだとかで、なおも成長中らしい。

彼女の存在に気が付いた女子たちは、司への道を無言で譲る。あくまで客観的なものとはいえ、ハーレム内では順位がはっきりしているため、ある種の階級のようなものが出来上がっているのだ。中でも二大巨頭は別格の待遇であり、百合の人柄も考慮すれば、彼女はこの場における機械仕掛けの神に例えても大げさではなかった。

ハーレム社会も、厳しいものだ。

「一緒に昼を取ろう」

百合が発したそれは、司本人への承諾を求めることよりも、私

が彼と同席するのだ』と宣言をするための言葉だった。

「あ、ああ。いいよ」

司は少し戸惑いながらも、誘いを受ける。

女子たちの憧れと羨望せんぼうが向けられても、百合は物怖ものおじせず堂々としていた。

……結局は、司・百合・晶子の3人で昼食を取る形に収束しそうである。まあ、パワーバランスの面ではそれが一番だろう。

あまりにも人垣が綺麗に割れていたので、百合の肩越しに司と視線が合ってしまった、どこことなく気まづくなった俺は、逃げるようにきびすを返した。そのまま昼休み中、どこへなりとも雲隠れしようとしたとき、教室の扉が勝手に開く。

「あ、お兄ちゃん」

現れたのは、妹だった。

妹は一瞬、俺に笑顔をくれたものの、すぐに滑るように移動した視線が奥の集団を捉えたのだろう、表情は苦笑いに変わる。

「朝、弁当忘れていったでしょ？ 持ってきたよ」

その両腕に提さげられた大小の包みが、これから繰り広げられる戦いを予感させた。

1話その4

妹が二つの弁当を持ってきたことを目敏く発見した司の、

「じゃあ美奈ちゃんも入れて5人で食べるか！」

という鶴の一声で、結局俺は囚われの身となった。親友としては俺たち兄妹の仲を気遣っているのかもしれないが、争点の中心となつている相手にされると単なる余計なお世話である。

ちなみに5人の配置は、司を基準にして、左右にそれぞれ百合と晶子。正面に俺がいて、斜め（俺からだ）と左隣で晶子の正面）に妹となつている。一年生のときをベースに妹を足した構図で、現在は各々、机の上に弁当を広げているところだった。ただし晶子と百合は司用も含めた二人分であり、肝心の司はなにも置いていないが。

……ちなみに俺は、うらめしそうな外野から、Gという通り名を持つ不快害虫でも見るような目をされている。もう若干の開き直りすら芽生えつつあった。

しかも、それはまた別につらいことがある。司が脇に美少女を侍らして、

「はい」「あ〜ん」「おいしい？」

的なシチュエーションをナチュラルに繰り広げているのを、司に特別な感情を抱いている妹とライブで観戦していることだ。

「ちよつと煮物を作ってきたんだ。食べてみてくれないか？」

「ああ」

「私のも」

「おう」

自分では全く箸を動かしていないくせ、競り合うように口元へと運ばれる料理の数々を、司は当然のように平らげていく。おまえはどこぞの王様か！？と脳内で突っ込みを欠かすことのない、俺にとっては見慣れた光景である。だが、高校入学したばかりで司の八レムには免疫がないであろう妹にとっては……

恐る恐る、横を確認する。

妹は、司たちをじっと眺めていた。そして自分の弁当に視線を落とし、おかずを箸で摘んでは顔を上げ、なにか言いたげに司の方を向いて口を開くものの、二大巨頭の連携のリズムに乗れずに勢いを失い、うつむいておかずを離す。

自分が食べることもなんかそっちのけで、司がなにか食べさせてもらうたびに、その反復である。

「おいしいか？」

「んん。この薄めながら素材の旨味を引き立たせるような味付けとか、俺好みだなー」

「私のは？」

「そりゃ言うまでもないだろ？ おいしいって」

フィルムに収めれば<青春>とテーマを付けられそうな三人と、輪の中に入りながらもフレームにさえ捕らえられない妹。

元々、我が強い娘ではないのだ。シュンとした妹の前髪が揺れるたび、俺は血が沸騰するような、名状しがたい衝動に襲われた。

「な、なあ司！ うちの味も試してみないか!？」

妹の目尻がだんだんと下がり、透明な雫がその瞳を覆っていく。俺はいてもたってもいられずに、上手いこと司の食事の切れ目を制した。

妹が箸で摘んでいた卵焼きを離してしまわないうちに、手に手を添えて正面に促す。

「ん？ なんだよ、純也のを食べさせてくれるんじゃないのか？」

「俺の分が足りなくなるから無理だ。それに結局、どっちも美奈の手作りなんだぞ」

味は変わらないって。

そう呟いた俺に、食欲がないんじゃないのかよ、と司は端正な顔を歪めて苦笑いする。それでも断るつもりはないらしく、軽く身を乗り出してきた。

妹は驚きと恥じらいを滲ませ、「えっ？ えっ？」なんて、俺と

司を交互に見やる。ほら、と強めに急かしてやると、赤ら顔ながらも意を決したように、じれったくなるぐらいゆっくりながらも身を乗り出し始める。

ギョラリーからは大小様々な悲鳴が上がっているが、二大巨頭に止めようとする動きはない。静観のつもり、か？ どちらにしても司に「はい」「あゝん」「おいしい？」が出来る千載一遇のチャンス、俺が、妹に、与えたのだ。

計らずともけしかけてしまう形になった刹那 後悔が雪崩のように押し寄せてくる。

妹と司の距離が縮まるのに反比例するように、淀んだ感情が心を占めた。

じわじわと迫っていく妹と司。俺はじりじりと身を焦がすだけで視線を絡ませる妹と司。俺は第三者の視点に立って。

信じられないぐらい頬を染めた妹となぜか真剣な顔をした司。…俺は、いったいどんな表情を浮かべればいいんだ？

実際には数秒の出来事であるのに、あたかもそれが永遠のように感じられた。頭は必死に回転するも咄嗟に妙案は浮かばず、根拠もあいまいな拒絶の意思を秘めたまま、なにも行動に移せなかった。

ついに妹の卵焼きが、司の口元へ届く。そして司の口が薄く開いて、妹のを食べてしまおうとしたときフラッシュバックする。

美奈の隣に司が立ち、俺は後ろで指をくわえて見ているだけという鮮明な光景。二人は恋人同士の距離で互いを見つめあい、満面の笑みをこぼしている。そして振り返った親友は、俺のことを「義兄さん」と呼び

決壊した。

昨日、今日と積もっていたものが全部、堪えきれずにあふれ出した。

そうとしか、説明しようがなかった。

なぜなら、俺がふと我に帰ったときには……

司の胸の辺りを押しつけて、妹が差し出す卵焼きにパク付いていたのだから。

1話その5

時が止まったような空白のあと、顔から血の気が引いた。

妹の驚いた表情と司の睨み（この反応ときたら！）が、横から割り込んだ俺の罪悪感を左右から攻め立てる。そしてこの局面で俺が取った行動は、一目散に逃亡することだった。謝るでもなく誤魔化すでもなく、背を向けて全力疾走することしか、出来ずにいた。

どくどくと心臓が波打つのに合わせて、足が赴く^{おもむ}ままに動かし続ける。

全力疾走が駆け足になり。

駆け足が早歩きになり。

そして早歩きのペースが落ち着くころには、俺は学校を抜け出して、あてもなく街をさまよっていた。

あの場ですぐに謝ってしまえばよかった、なんて今更になってほぞを噛む。恋路を応援したと思いきや手のひらを返すように邪魔をして、フォローも入れずに逃げてきた兄貴は、どんな顔をして妹に会えばいいというのだ？

しかも自分で食べてしまうなんて……シスコンも度を越してやいないか？

学生服のままだと悪目立ちするだろう、とか上履きのみまだから汚れる、など脳裏をよぎるもの全てより優先されて、頭の中を占めるもの。もう考えないようにしたくても、こうして街を歩いていると、妹や司と過ごした記憶が浮かび上がって、それを許さない。

あれは小学生のころに発見した面白い雑貨屋で。

あれは中学生のときに背伸びしながら入ったレストランで。

洋服の買い物に付き合ったデパートも。

たまに遊びに行くゲーセンも。

どこもかしこも二人の影ばかりで、目を背けるたびに違う思い出がよみがえり、街中を巡っていく。

俺は時間の感覚もないまま、ひたすらに歩いた。

ふらふらとしているようで、それでも、最終的にはここへ向かうように誘われていたのかもしれない。だいぶ遠回りをしたせいだろうか、学校を出たのは昼だったのに、いつの間にか辺りは夕暮れの色に染まっている。

たどり着いたのは、家の近所にある公園だ。

すでに遊んでいる子供たちの姿はなく、貸しきり状態である。ゆつくりと砂地を踏みしめて歩き、ベンチに身を委ねた。

「……馬鹿やろうだな、俺……」

全身が、心地よい疲労感に包まれている。口について出た言葉に、なぜか涙腺が緩んだ。

それを誤魔化すように、急いで目を閉じる。
まぶたの奥に、最後の影が浮かんだ。

12年ほど前のことだ。

そのころ俺と『美奈ちゃん』は、ほぼ毎日のようにこの公園で待ち合わせて、一緒に遊んでいた。

しかし、あるときから一週間ほど、彼女の姿を公園で見かけなくなった。その前日に虫を使ったイタズラをして『美奈ちゃん』を泣かせていた俺は、子供ながらに相当焦ったものだ。

もしかして、虫のイタズラをされるのが嫌になって、来なくなつたのかな？ と。

謝りに行くか、行かないか。行つたとしても、どう謝るか。

悶々もんもんと考えながら過ごしていた日々は、母さんが唐突に『美奈ちゃん』を家に連れてきたことで打ち砕かれた。

いきなり対面させられたのにも戸惑つたが、何より驚いたのは彼女の様子に、である。

目の下に大きな隈を作り、顔からは表情が抜け落ちたようで、光を失った瞳だけが悲しげに映った。

『美奈ちゃん』は、虫が苦手という弱点を除けばよく笑う女の子、

という印象を持っていたので、あまりの劇的な変化にしばらく呆けていたように思う。

気が付くと俺は、しばらく『美奈ちゃん』と一緒に遊んできてね、という母さんの言葉に従っていた。

遊びに行ったのは当然ながら、この公園である。

ちょうど黄昏時で、二人揃って燃えるような夕日を浴びながら、無言のままブランコをこいでいた。

「ゴメンなさい」

そしてなんの前触れもなく、俺は開口一番で謝ったのだ。

彼女の尋常でない様子の原因が俺のイタズラだったら。懸念が胸を掠めて、ただ謝るしかなかった。

「ゴメンなさい」

堰を切って溢れた言葉は、しばらく繰り返される。他にどう言えはいいのかも分からず、己の誠意が命じるままに頭を下げたのだ。

「なんで純也くんがあやまるの？」

そのとき久々に聞いた『美奈ちゃん』の声は、このまま消えてしまうのではないかと心配するぐらい、か細かった。

「だって、僕のせいで美奈ちゃん……」

その続きは、音にならずに消える。

顔を上げて『美奈ちゃん』に相對すると、彼女は無表情のまま泣いていた。

いや、実際は目も潤んでいないのだが、俺には彼女の横顔が紅く照らされる一筋のラインが、涙を流しているように見えたのだ。

途方もないほど綺麗で、それ以上に悲しかった。

「ちがうよ。純也くんは悪くない」

紅い涙の線を振り払うように、『美奈ちゃん』は頭を振る。

「じゃあ、どうして……？」

「……お父さんとお母さん、死んじゃったの」

『美奈ちゃん』がこぼした言葉は、俺にも衝撃的だった。

全く、聞かされていなかったのだ。

たしかに両親が二人して黒い服を着て、慌しそうに家を空けることはあった。それでも考えの及ばなかった俺は、そのタイミングで、『美奈ちゃん』の口から事実を知ることになり、驚愕した。

両親も色々と考えた末に言わなかったのだらうが、当時の俺はなにも伝えてくれなかった両親を、少し恨んだ。

「そう、なんだ……」

震えた声で、気の利いた台詞も出ない。

「……うん、そうなの……」

『美奈ちゃん』は、ただ頷く。

彼女はじつと耐えるようにつつむいて、二人はまた沈黙に包まれた。

ただ、俺には『美奈ちゃん』が大声で泣き出しそうなのを、隠しているように思えて。

そのときが、初めてだった。

守りたい。

笑顔でいてほしい。

そんな風に、誰かのことを思ったのは。だから俺は 『美奈ちゃん』を抱きしめた。

「僕が守るから。美奈ちゃんのこと」

「絶対に守るから」

「いなくならないから」

そう、彼女に誓った。

「だから……」

今は泣いても、いいよ。

「……なにが泣いてもいいよ、だ。俺の方が泣いてたんだよな」

当時の影。未だに色あせることのない、俺たちが兄妹になる前の
思い出。

あのときの誓いは、現在の自分を形成する原点だった。

まさかあれから家に帰った途端に、両親から『美奈ちゃん』が妹になることを告げられるとは思ってもみなかったが、誓いを果たすには好都合だと喜んだものだ。

しかしあのときの俺が本当に守りたかったものは、そのときから、手の届かないところに行ってしまったのかもしれない。

『純也くん』はシスコンの兄貴になつて。『美奈ちゃん』は可愛い妹になつて。

そして美奈が恋をしたのは、俺の親友だったのだ。
自然と、苦笑いが顔を覆った。

「ブランコでも、こぐか」
あのときみたいに。

大きくなつた自分には小さく感じられる遊具は、腰掛けただけでギイと軋んだ。

持ち手の鎖は赤茶色に錆びており、懐古する心が締め付けられるようだった。

「帰りたくない……」

しかしいつまでもここに居ることはできない。加えて、あのときの誓いを振り返ることは、バラバラだった心を一つの方向へ導いてもいて、言うほどの気持ちを秘めてはいなかった。

だから、口にしたのは最後の未練のようなものである。それに別れを告げるためにも、この黄昏が終わるまでは感傷に浸っていたのだ。

家に戻ったら妹に謝るだろう。明日の学校で司にも謝らないといけない。そうしたら、世話焼きシスコン兄貴の通常営業になる。

ああ、そつだ。俺は妹を……

「あ……ここに居たんだ」

胸の中の独白を、一人の声が遮った。

この数時間が久しく感じられる音色は、何の抵抗もなく心へとしみ込んできて、俺は愛おしさで堪らなくなってしまう。

「お兄ちゃん、いきなり飛び出して行っちゃうから、心配したんだ

よ？」

本当に心配そうな表情でこちらへと近づいてくる妹の姿が、『美奈ちゃん』と重なる。

ふいに暖かいものが、頬を伝った。

「泣いてる……の？」

「っ……いや、光が反射してそう見えるだけだろ。それにもし俺が泣いてるんだつたら、美奈があまりにも可愛いせいでしな」

自分では見えもしない筋をなぞる振りをして、流れていた涙を拭く。

「なにそれ。また新しい路線のシスコン発言だね」

妹は心配そうだった表情を残しつつも、おかしそうにくすくすと笑った。

守りたかった笑顔が、すぐそこにある。しかし妹をあのときのように抱きしめることは、二度と叶^{かな}わないのだ。

目が赤くなっているかもしれないのは夕日が誤魔化してくれるのを期待して、俺は妹に正面から向き合った。

「さつきは、ごめんな。あんなことするつもりじゃなかったんだが

……」

「うっん。全然気にしてない……っていったら嘘になるけど。元々、自分で言い出さないといけない事だったし」

今度からはお兄ちゃんを心配させないようにしないとね、と妹は舌を少し出して苦笑い。

俺はなんと答えれば良いのか分からずに、少し困った。そうだな、と苦し紛れに相槌を打つだけが精一杯で、会話を途切れさせてしま

う。
静寂のまま数秒が流れて、今度は妹のほうが真剣な表情になっていた。

「私のほうこそ、ごめんね」

「ん？ どうかしたか？」

謝られた理由を問い返す。

自分でも驚くほど優しげな声は、妹の表情を少し緩ませることに成功した。

「だって私が司さんのこと好きだって言ったせいで、お兄ちゃん悩んでるから」

「いや、いいんだ。いつも美奈のこと見ているくせに気が付かなかった俺も悪い。それに、いつかは知らないといけないことだからな」強がってみせても、妹にはバレバレかもしれない。だが兄としては、あまり情けないところを察知されたくはないのだ。

司の奴も罪作りだな、とふざけた台詞をばやくことで調子を取り戻そうとする俺を尻目に、妹は再び表情を引き締めた。

「本当はね、お兄ちゃんに私以外にも目を向けてほしかったの」告げられた言葉を、すぐには理解できなかった。

しかし美奈はこれ以上ないほど真剣な顔で、続ける。

「だってお兄ちゃん、いつも妹のことばかり優先して、他には全然振り向かないから」

「もう少しシスコンが弱まれば良いかなって。そう思って告白したんだ」

取り繕った表情など、確実に崩れていた。

そして、この上なく情けない顔を晒さらしていたに違いない。妹が考えていたことは、それだけ俺にとっては予想外で、衝撃をもたらしたのだ。

「美奈……」

「でも、失敗しちゃったね。逆にお兄ちゃんを縛るだけだったみたい」

妹は眉根を下げて、申し訳なさそうに呟く。

「だから、ごめんね」

それからまた、どちらとも口を開かずの時だけが流れる。俺はその間、なるべく心を整理しようと勤めた。

結局、守ろうとしていた妹は、俺のことを心配をしてくれていたというのか。

そしてそんな気持ちをおくびにも出さず、黙って守らせてくれていたのか。

俺たちが兄妹になってから、ずっと、ずっと

妹には、敵わない、な。

「……少し、確認させてくれ」

それは、確認しなくても分かっているだろう、と心の中で呆れてしまうようなことである。

だが情けない兄貴である俺が踏み出すには、どうしても必要なことだった。

「司のことが好きなのは、嘘じゃないんだな？」

「もちろん、本当だよ」

少し馬鹿正直なところもあるぐらいの妹が、そんな嘘をつくはずがない。

「今日の様子見て分かったと思うが、競争相手多いし厳しいぞ？」

「確かに驚いたけど、覚悟はしてたから」

我の強い娘ではないが、心に芯は通っているから、簡単に諦めもしないだろう。

「本当に本当なんだな？」

「うん、本当に本当に本当。誓ってもいい」

俺も相当に諦めが悪いらしい。

念を押すように呟いて、ようやく先ほどの決心の続きを終わらせられた。

「そうか……分かった」

あのとき誓った『美奈ちゃん』は、確かにもういない。それでも俺は、妹を守りたいと心の底から思っている。

だからこれは、二度目の誓いだ。言葉には乗せないけれど、過去の密やかな決別だった。

「美奈、頑張れよ」

ありがとう。頑張るよ。

そう満面の笑みくれた妹に、俺は兄貴の顔を返せたと思うから。

司が、妹を守ってくれるように。二人一緒に、笑顔で暮らしていけるように。

1話その5（後書き）

とりあえず導入となる1話はこれで終了になります。

次からはようやく本題に入っていく段取りですので、のろのろとした更新速度でも、どうか見捨てずに頂ければ幸いです。

ご意見やご感想など、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3122s/>

あなたにおまえとよばれない

2011年6月13日00時30分発行